

世界における日本文化

—改めて人類の歴史に果たす使命を考える—



元文化庁長官
国際ファッション専門職大学学長
(一社)人文知応援フォーラム
共同代表

近藤 誠一

専門知を束ねる横系
2023年はこのよ
うな年になるであろ
うか。気候変動、新
型コロナ感染症、そ
してウクライナに代
表される国際秩序の
綻びといふ、今の人
類が直面する三つの
問題について、その
場しのぎの対策に留
まらず、根本的解決に
向けてどう進むか。残
念ながら楽観的には
なれない。

雑に絡むもので、い
かなる分野の専門知
も単独では扱いきら
ない。すべての専門
知を動員し、それら
を横系で繋げなければ
解決策を編むことは
できない。しかしそれ
は一人の人間の能力
を超える。

た種は食物連鎖を乱
すゆえに淘汰される
はずである。しかし
技術の急速な進歩は
人類がこの制約を越
えることを可能にし
た。農業、畜産革命
や医学を含む科学技
術革命などによる食
料増産、健康増進
である。そのお陰で
人類は理性による抑
制力を超えて、あま
りな欲望追求に走る
ようになった。それ
は文明がここまで進
達させる原動力とな
ったが、いまその副
作用が制御不能にな
りつつある。

第二が、近代文明を
牽引して来た西洋が
抱えてきた自然資源
と見る思想である。
自然と人間は中世の
キリスト教の影響によ
って別のものと認識
され、自然は「内か
ら直観される」同質
者ではなく、実験操
作によって「外か
ら」理解される客
体として認識される
ようになった。それ
がデカルトの主客二
元論によって西洋の
思想の根幹に発展し
た(伊東俊太郎『近
代科学の源流』)。

西洋が自分を自然の
一部と捉え、生態系
の摂理を守るために
欲望を抑制することを
困難にする三つの要
素がある。「自由」
の信奉である。社会
の運営には個人の
自由と全体の秩序の
バランスを計るため
の「自己統制」が必
要だ(猪木武徳『自
由と秩序』)。しかし
専制君主や教会から
の解放によって近代
社会をつくったと自
負をもつ西洋人にと
って、自由は生態系
が要求する秩序(食
物連鎖のルール)よ
り優先される。

能している。しかし
この思想を言葉にし
ると、ヘーゲルなど
の言う「アジアの
停滞」というアジア
批判を想起させ、西
洋人を納得させるこ
とは至難の技である
。とりわけアジアの
専制大国が、あから
さまに自由より秩序
を重んじる行動をと
る現在、それは一層
難しい。そしてそ
も彼らに非西洋に
傾ける用意がないこ
とは、「いつになったら
西洋を了解するであ
ろう、否、了解しよ
うと努めるであら
う」という岡倉天心
の言葉からも明らか
である(『茶の本』)。
しかしこれは有限の
地球で暮らす以上、
受け入れざるを得な
い自由の制限と考
えるべきである。そ
の考えを広めること
は、われわれの権利
であるだけであら
ない。義務でもある。
それを果たす上で最
良の方法は、まず日
本の気候風土や文化
、習慣を体験させ、
その上で簡潔な解説
を提供することであ
る。生活に染み付い
た人生訓である「足
を知る」、「お互
いさま」、「三方
良し」、「金は天下
の回りもの」などは
、生態系の摂理であ
る物質循環や食物連鎖
に通じ、自然との
親和性が極めて高
い。『方丈記』の
有名な冒頭の一文
は、動的平衡を体
現した名文である。
こうした日本人の
自然観を評価する
西洋人は少なくない
が、彼らはいずれも
日本に滞在してその
価値を感じ取った
(『アインシュタ
イン日本で相対論を
語る』、レヴィース
トロース『月の裏
側』)。日本が明治
以降西洋化を進め
ながらこうした自
然観を和食や年中
行事などによって
語り伝えていくこ
とも説得の材料と
なる。こうした体
験を外国人の間に
広げること、いま
世界に広がっている
西洋的理念体系を
無意識のうち
に内側から変革
していく日が来る
ことを期待したい。

何故ならこれらはい
ずれも複雑で相互に
絡みあった大きな
問題群の一部(大氷
山の一角)に過ぎず
、単独で解決できる
ものではないからだ
。この問題群と人
類の文明との関係
や、民族・感情・宗
教などを、関連する
専門知と人間の複
雑さがそれを有意
に繋げる。『こん
どう・せいいち』
1972年外務省入
省、広報文化交流
部長を経て、2006
年からユネスコ日
本政府代表部特命
全權大使。08年よ
りデンマーク大使
。10年より13年ま
で文化庁長官を務
め、三保松原を含めた
富士山の世界文化
遺産の登録を実現
。現在、近藤文化・
外交研究所代表、
東京都交響楽団理
事長、TAKUMI-Art
 du Japon代表理
事などをつとめ、
19年4月国際フ
ァッション専門職
大学学長に就任。

横系として的人文知
すなわち「人間とは
何か」に関する先人
達の知恵とを組み合
わせつつ一つの私論
を試みたい。まず自
然科学が明らかにし
たことは、自然の生
態系は、物質循環、
食物連鎖、動的平衡
(注)など複雑なシ
ステムによって38億
年にもわたって生命
を繋いできたこと、
そしてその摂理に
従う種のみが生き
残ってきたことだ。
だがそこで生まれた
人類は、文明を急速
に進歩させてその
摂理に反する行動を
とり、生態系の維持
を脅かすところまで
進んだ。人口爆発、
森林破壊、資源の大
量消費が、気候変動
や感染症、多くの野
生動物の絶滅を誘
発している。古代以
来の識者による警告
にも拘わらず、何故
こうした道を歩むこ
とになったのか。ヒ
トは三つある。

第一は技術の進歩
が欲望の果てしなき
追求を可能にしたこ
とである。生態系の
摂理の下では、人口
が増え過ぎ

日本文化の自然との
親和性
ここで注目される
のが日本の伝統的
思想である。自分を
全体(自然)の一部
と捉え、自己抑制
することを守り、秩
序を維持することを
尊ぶ。それは自然と
の融和や社会の安定
のために適切なOS
として機能している。

こうした日本人の
自然観を評価する
西洋人は少なくない
が、彼らはいずれも
日本に滞在してその
価値を感じ取った
(『アインシュタ
イン日本で相対論を
語る』、レヴィース
トロース『月の裏
側』)。日本が明治
以降西洋化を進め
ながらこうした自
然観を和食や年中
行事などによって
語り伝えていくこ
とも説得の材料と
なる。こうした体
験を外国人の間に
広げること、いま
世界に広がっている
西洋的理念体系を
無意識のうち
に内側から変革
していく日が来る
ことを期待したい。

それは政府の政策
だけでは達成でき
ない。冒頭述べた
専門知の生かしか
らと同様、日本人
一人一人がこの日
本的感性を、隣接
領域(異文化)との
対話を重ねながら
世界に感じさせる
努力を続けていく
ことが効果的であ
る。「いのち」を
主題とする2025
年の大阪万博は
一つのチャンス
かも知れない。

た種は食物連鎖を乱
すゆえに淘汰される
はずである。しかし
技術の急速な進歩は
人類がこの制約を越
えることを可能にし
た。農業、畜産革命
や医学を含む科学技
術革命などによる食
料増産、健康増進
である。そのお陰で
人類は理性による抑
制力を超えて、あま
りな欲望追求に走る
ようになった。それ
は文明がここまで進
達させる原動力とな
ったが、いまその副
作用が制御不能にな
りつつある。

第二が、近代文明を
牽引して来た西洋が
抱えてきた自然資源
と見る思想である。
自然と人間は中世の
キリスト教の影響によ
って別のものと認識
され、自然は「内か
ら直観される」同質
者ではなく、実験操
作によって「外か
ら」理解される客
体として認識される
ようになった。それ
がデカルトの主客二
元論によって西洋の
思想の根幹に発展し
た(伊東俊太郎『近
代科学の源流』)。

西洋が自分を自然の
一部と捉え、生態系
の摂理を守るために
欲望を抑制することを
困難にする三つの要
素がある。「自由」
の信奉である。社会
の運営には個人の
自由と全体の秩序の
バランスを計るため
の「自己統制」が必
要だ(猪木武徳『自
由と秩序』)。しかし
専制君主や教会から
の解放によって近代
社会をつくったと自
負をもつ西洋人にと
って、自由は生態系
が要求する秩序(食
物連鎖のルール)よ
り優先される。

能している。しかし
この思想を言葉にし
ると、ヘーゲルなど
の言う「アジアの
停滞」というアジア
批判を想起させ、西
洋人を納得させるこ
とは至難の技である
。とりわけアジアの
専制大国が、あから
さまに自由より秩序
を重んじる行動をと
る現在、それは一層
難しい。そしてそ
も彼らに非西洋に
傾ける用意がないこ
とは、「いつになったら
西洋を了解するであ
ろう、否、了解しよ
うと努めるであら
う」という岡倉天心
の言葉からも明らか
である(『茶の本』)。
しかしこれは有限の
地球で暮らす以上、
受け入れざるを得な
い自由の制限と考
えるべきである。そ
の考えを広めること
は、われわれの権利
であるだけであら
ない。義務でもある。
それを果たす上で最
良の方法は、まず日
本の気候風土や文化
、習慣を体験させ、
その上で簡潔な解説
を提供することであ
る。生活に染み付い
た人生訓である「足
を知る」、「お互
いさま」、「三方
良し」、「金は天下
の回りもの」などは
、生態系の摂理であ
る物質循環や食物連鎖
に通じ、自然との
親和性が極めて高
い。『方丈記』の
有名な冒頭の一文
は、動的平衡を体
現した名文である。
こうした日本人の
自然観を評価する
西洋人は少なくない
が、彼らはいずれも
日本に滞在してその
価値を感じ取った
(『アインシュタ
イン日本で相対論を
語る』、レヴィース
トロース『月の裏
側』)。日本が明治
以降西洋化を進め
ながらこうした自
然観を和食や年中
行事などによって
語り伝えていくこ
とも説得の材料と
なる。こうした体
験を外国人の間に
広げること、いま
世界に広がっている
西洋的理念体系を
無意識のうち
に内側から変革
していく日が来る
ことを期待したい。

それは政府の政策
だけでは達成でき
ない。冒頭述べた
専門知の生かしか
らと同様、日本人
一人一人がこの日
本的感性を、隣接
領域(異文化)との
対話を重ねながら
世界に感じさせる
努力を続けていく
ことが効果的であ
る。「いのち」を
主題とする2025
年の大阪万博は
一つのチャンス
かも知れない。

それは政府の政策
だけでは達成でき
ない。冒頭述べた
専門知の生かしか
らと同様、日本人
一人一人がこの日
本的感性を、隣接
領域(異文化)との
対話を重ねながら
世界に感じさせる
努力を続けていく
ことが効果的であ
る。「いのち」を
主題とする2025
年の大阪万博は
一つのチャンス
かも知れない。